

香川大教育 ○上玉 啓子 時岡晴美
香川県明善短大 田窪 純子

目的 児童の遊びの貧弱さや、生活時間の過密化等、生活環境の悪化が多く報告されているが、児童期の人間関係や、日常生活における生活空間は、成長と共にどのように拡大しているのだろうか。本報告では、児童のショッピング行動に着目し、その実態と、ショッピング行動の影響要因を捉えることによって、児童の生活圏について考察する。

方法 香川県T市立Y小学校（男子134名、女子140名、計274名）の全児童を対象として、1992年12月4日、集合調査法を用い、クラス毎に教師による説明を加えながらアンケート調査を実施した。調査項目は、一週間のショッピング行動、店の位置、こづかい、主な遊び場、調査前日における主な行動の種類等である。一週間のショッピング行動については、毎日調査した。また、1・2年生については、児童に持ち帰らせて父母に記入してもらった。対象校区は、地方都市中心部で、商店街、官庁街の中に位置している。

結果 ショッピング行動のタイプ別学年変化では、親同行型は、高学年になると次第に減少（1年生5.6割、4年生約2割、6年生0.6割）し、子単独型が、増加（1年生約1割、4年生約2割、6年生約4割）する。子単独とするショッピング行動の頻度は、6年生で多く（平均1人当たり、3.3回）、買わないショッピング行動もみられ（5年生7名、6年生11名）、そのうち7割の児童が、遊び場に商店街を挙げている。